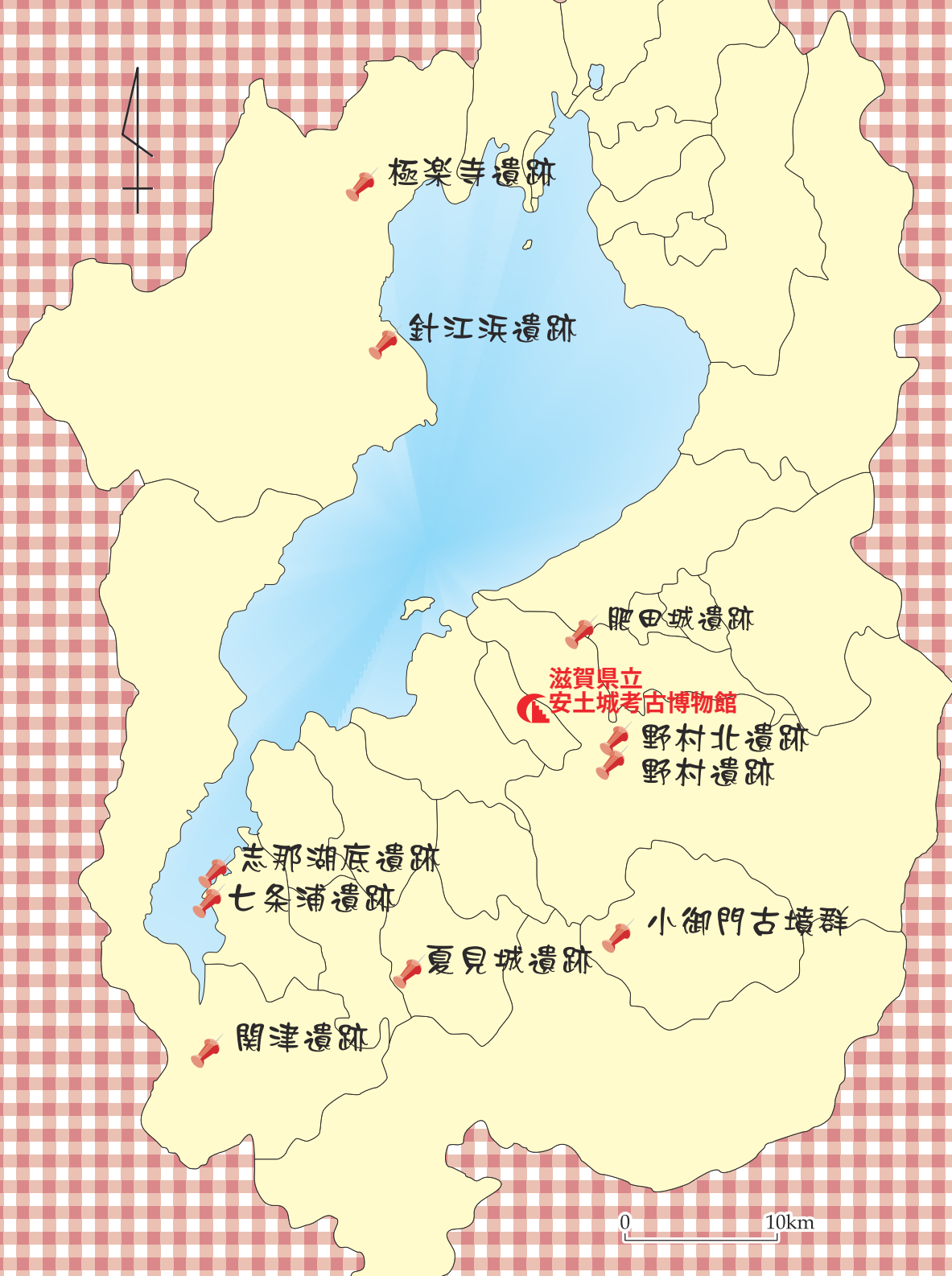


あの遺跡は今!⑧

埋蔵文化財整理調査成果報告会資料



平成21年2月22日(日)

財団法人滋賀県文化財保護協会

整理調査成果報告会 ―整理作業室特別公開・出土品展示― について

財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県教育委員会から依頼を受けて県内各地で埋蔵文化財の発掘調査を行っています。発掘調査には、現地で遺跡を発掘して得られた情報を記録する現地調査と、現地調査で得られた情報と土器などの出土品から得られる情報をあわせて遺跡の時代や性格・特徴などをとりまとめる整理調査があります。その一部は、滋賀県立安土城考古博物館内で行っており、普段の整理作業の様子は、博物館の回廊展示として窓越しにご覧いただいています。

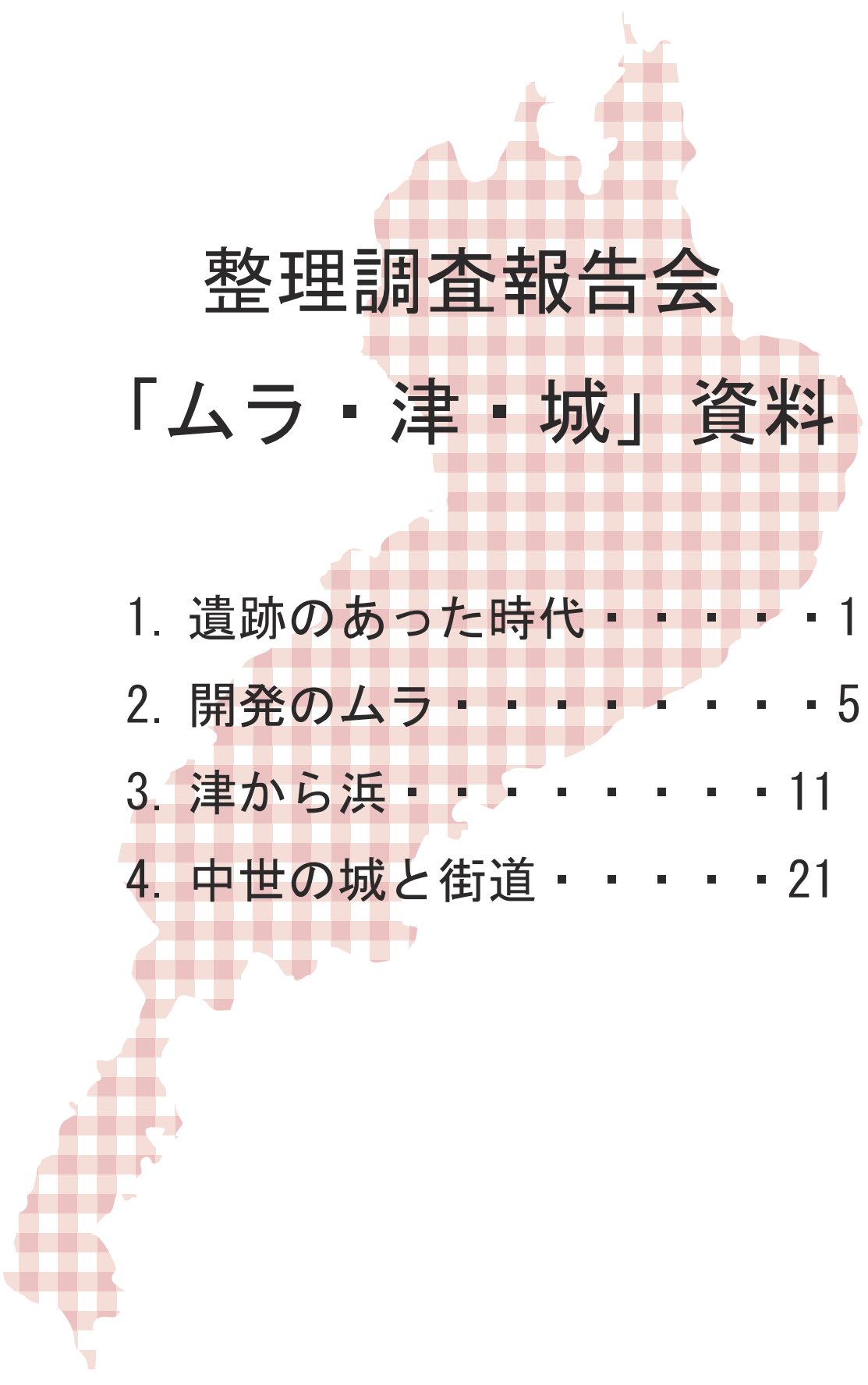
発掘調査で得られた情報は「現地説明会」を開催していち早く公表していますが、整理調査を通して新たな知見が得られることも多くあります。これらの整理調査の成果を公開する企画として、また、出土品に直接触れる整理作業体験、レプリカ制作、さらに整理作業の様子や出土品の特別公開を通して文化財に親しむ場を提供することを目的として、埋蔵文化財整理調査成果報告会・整理作業室公開事業として「あの遺跡は今！」を平成17年度から実施しています。

整理作業室特別公開は、展示してある出土品をただ見学するのみでなく、土器の復元や実測作業など、遺跡からの出土品を調査している様子を間近に見学することができます。また、遺跡から出土した各時代の特徴的な土器に直に視て触れてその特徴をもとに分類作業と拓本をしていただくことで、整理作業を実際に体験していただだけ、さらに、縄文時代と同じ方法で文様を施したオリジナルアクセサリ製作をしていただけることもできます。

この機会に埋蔵文化財の調査成果や出土品を間近で見学し体験していただくことで、より滋賀の歴史を体感し、文化財への親しみと理解を深めていただき、豊かな未来を創造していただければ幸いです

平成20年度に調査整理課で整理調査を実施している主な遺跡

遺 跡 名	所在地	調査原因	主な時代
関津遺跡	大津市	ほ場整備	後期旧石器～近世
志那湖底遺跡	草津市	琵琶湖開発	縄文～古代
七条浦遺跡	草津市		縄文～古代
針江浜遺跡	高島市		弥生
夏見城遺跡	湖南市	ほ場整備	中世
野村遺跡・野村北遺跡	東近江市	ほ場整備	古代・中世
肥田城遺跡	彦根市	ほ場整備	古墳～中世
極楽寺遺跡	高島市	県道建設	古墳・古代
小御門古墳群	日野町	施設解体	弥生・古墳



整理調査報告会

「ムラ・津・城」資料

1. 遺跡のあった時代 1
2. 開発のムラ 5
3. 津から浜 11
4. 中世の城と街道 21

遺跡のあった時代

今回報告する大津市関津遺跡、東近江市野村・野村北遺跡、湖南市夏見城遺跡は、それぞれどのような時代に生活が営まれたのでしょうか。

◆後期旧石器時代（約3～2万年前）

旧石器時代は、日本列島は氷河期を含む現在より寒冷な時代で、日本列島も大陸から完全に分離せずゾウなどの大陸の動物も移り住んでいました。多賀町では約30万年前のアケボノゾウやナウマンゾウの化石が見つかっており、愛知川川床からはゾウの足跡化石も見つかっています。

関津遺跡から後期旧石器時代（約2万年前）の角錐状石器かくすいじょうせつきが見つかっています。この石器は滋賀県内でも最も古い時期の出土品の一つです。この時代は、狩猟や採集により食糧を確保していました。出土した石器は、動物を捕獲するために用いられた槍先です。この時代の石器は、瀬田川川底や瀬田丘陵や田上山麓たなかみなどからも出土しており、瀬田丘陵から田上周辺にかけては滋賀県でも古くから人類が生活していた地域です。

◆縄文時代・弥生時代・古墳時代（約1万年前～1400年前）

旧石器時代の氷河期が終わると次第に温暖化した日本列島は、石器時代から縄文時代に変わります。縄文時代の人々は、土器を作り、狩猟採集した動物や木の実などの食料を煮炊きして生活していました。滋賀県でもっとも古い土器は粟津湖底遺跡のク
リ塚から出土した約9000年前の深鉢と呼ばれる煮炊用の容器です。

弥生時代になると、大陸から稲作文化が伝わってきます。これまで狩猟採集に頼っていた人々は、長期保存が効き安定した食糧を供給できる米作り中心の生活に変化します。一方食糧の貯蔵は富の集中と貧富の差、階層差を生じ、やがてクニの形成を促しました。滋賀県の代表的な遺跡では大中の湖南遺跡や服部遺跡・下之郷遺跡・伊勢遺跡などがあります。

古墳時代は、約300年間を前期・中期・後期に区分します。古墳時代前期には、畿内を中心に巨大古墳が造営され、中期には各地に古墳が造られてゆきます。後期には、地方の豪族も大小の古墳を造営してきます。それと同時にヤマト王権に権力が集中し、古代国家の成立へと進んでゆきます。近江国の前期古墳では、安土瓢箪山古墳ひょうたんやまがあり、雪野山古墳ゆきのやまは未盗掘の前方後円墳でした。中期には各地で古墳が造営され、後期には群集墳と呼ばれる100基近い数の古墳群が百穴古墳群ひやつけつなど各地に造られます。

今回報告する遺跡では、関津遺跡で縄文時代後・晩期の落し穴や土器棺墓、弥生時代の竪穴住居、古墳時代の溝などが見つかっています。

◆飛鳥時代（約1450年前）

日本が古代国家として機能し始める時期であり、関津遺跡で集落や役所跡などが見つかっています。関津遺跡の背後にある田上山はスギやヒノキの美林が茂り、藤原京や東大寺などの都や寺院の建築材として切り出され、瀬田川の水運を利用して運ばれました。その材木管理のために田上山作所たなかみさんさくしよが造られました。山作所に関連したと思われる建物跡や滋賀県内でも最古級の墨書土器も見つかっています。

また、7世紀後半には野村遺跡のある愛知川左岸でも台地の開発が始まります。

◆奈良・平安時代（約1300～800年前）

律令体制による中央政治は、奈良の平城京で行われました。近江国は都に近く、国力が豊かで交通の要衝でもあり、政治的にも文化的にも重要な役割を果たしました。そのため、近江国は大・上・中・下国の4等級の国の大国で、中央政府から6人の国司こくし（役人）が派遣されていました。近江国司は出世コースに組み込まれ、エリート官僚である藤原一族の藤原武智麻呂・藤原仲麻呂・藤原種継たねつぐや平安時代には菅原道真みちざねなども近江国守を経験しています。地方行政支配には、各国に今の県庁にあたる国庁さんだいじがおかれ、近江国庁は瀬田丘陵の大津市三大寺にあり、周辺には関連施設や国分寺なども造られました。また国の下の各郡・郷には郡衙ぐんが（郡家）・郷家がおかれ租庸調の税の徴収などにあたりました。近江では滋賀郡・甲賀郡・蒲生郡など12の郡があり、これまで発掘調査で見つかっている郡衙跡は栗太郡衙推定地の栗東市岡遺跡があります。

関津遺跡では幅18mの大規模な道路跡が見つかり、道路跡は当時近江の国庁があった瀬田丘陵から直線で奈良方向に向っています。道路周辺には70棟以上の掘立柱建物が整然とならび、建物は役所跡とみられます。この道路は古代の官道である「田原道」たわらみちとみられ、この遺構からも近江国の重要性が判ります。

野村遺跡・野村北遺跡では、奈良時代から平安時代の集落跡が見つかっています。野村遺跡は愛知川左岸扇状地の台地にあ



関津遺跡「田原道」跡

り水が得にくく水田耕作には不便な地域ですが、奈良時代に本格的に開発が進んできたと思われます。奈良時代は律令制度の公地公民制により民衆や水田などの土地はすべて中央政府の管理として、個人が私的に所有することはできませんでした。しかし、人口や財政需要の増加で国家財政を増やす必要から墾田を奨励し、各種の法令を出しますが結局は財力のある有力貴族や大社寺、地方豪族などが農地を開発し私有化します。この大規模な私的土地所有が初期荘園です。この地域の大規模開発は、灌漑用水路を開削し愛知川の水を台地に引き込んで水田化しました。その名残は筏川、別名狛井や右岸の愛知井などの用水路にあります。いずれも、渡来系氏族が開発に関係したとする伝説があります。奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物はこの時期に台地の開発に携わった人か、開発後の農民の集落跡と考えられます。

◆室町時代～戦国時代（約700～400年前）

夏見城は長享年間（1487年ころ）に夏見大学が領主となり、天正13年（1586）秀吉に領地を召し上げられるまで約100年間存続したと見られます。この時代は、室町時代から戦国時代の内乱期を経て織田・豊臣氏の全国統一に向う時代です。室町幕府の9代将軍足利義尚^{よしひさ}は近江守護佐々木六角氏を征討するため近江に侵入します（長享の乱）が六角氏は甲賀に逃げ、夏見氏などの甲賀の地侍の協力を得て反撃します。その後、夏見氏や望月氏など甲賀の地侍53家は郡中惣という地域連合体を形成しそれぞれが協力し独自の城を構え戦国時代を生き延びました。



夏見城遺跡毛抜き



野村北遺跡石組み溝

野村北遺跡では、溝で区画された屋敷跡が見つかっています。文亀2年（1502）の「大安寺三綱僧領近江国神崎郡高屋郷柿御園惣荘絵図」^{さんこう}にはこの地域の集落の様子が描かれています。ここに描かれた「大安寺地頭代公文所屋形」^{くもんしよ}は、野村北遺跡からみつけた屋敷跡に一致する可能性があります。この時代になると地元^{げこくじょう}に根付いた農民が領地を拡大し領地を守るために地侍化してゆきます。有力な農民は荘園の管理を任

されます地頭として壕で囲まれた屋敷を構えます。やがてこうした土豪の一部は武装化し戦国時代の下剋上の時代に一層の領土拡大を図ろうと、領地争いの戦乱の渦に巻き込まれてゆきます。

遺跡のあった時代

時 代	主 な 出 来 事
約20000年前	関津遺跡で角錐状石器が使われる
約12000年前	縄文時代始まる
約3000年前	関津遺跡で土器棺墓がつくられる
約2500年前	稲作始まる
2 4 8 年頃	卑弥呼死す
4 0 0 年頃	畿内を中心に巨大古墳が造られる
6 0 4 年	冠位十二階制の施行、憲法十七条の制定
6 5 0 年頃	関津遺跡の墨書土器使われる
6 6 7 年	大津宮に遷都する
6 7 2 年	壬申の乱起きる
6 9 4 年	藤原京に都をおく
7 1 0 年	平城京に遷都する
7 2 3 年	三世一身法の施行
7 4 2 年	紫香楽に離宮を造る
7 4 3 年	墾田永年私財法の施行
	この頃、野村・野村北遺跡周辺の開発進む
7 6 1 年	淳仁天皇・孝謙上皇が保良宮に行幸する
	この頃、関津遺跡の「田原道」造られる
7 6 4 年	藤原仲麻呂の乱 仲麻呂は近江で死す
7 8 4 年	長岡京に遷都する
7 9 4 年	平安京に遷都する
	この頃、野村北遺跡の掘立柱建物あり
1 1 9 2 年	源頼朝征夷大將軍となる（鎌倉幕府開始）
1 3 3 8 年	室町幕府の成立
1 4 6 7 年	応仁の乱起こる
1 4 8 7 年頃	夏見大学、夏見城の領主となる
1 4 8 7 年	長享の乱 六角高頼、足利尚義に撃たれ甲賀に退く
1 5 0 2 年	野村北遺跡、柿御園惣荘絵図描かれる
1 5 7 3 年	足利義昭追放（足利幕府の終焉）
1 5 7 6 年	安土城完成
1 5 8 2 年	本能寺の変、信長死す

開発のムラ

— 東近江市^{のむらきた}野村北遺跡・^{のむら}野村遺跡 —

野村北遺跡・野村遺跡は東近江市（旧八日市市）野村町に所在します。遺跡一帯の土地は、愛知川によって形成された扇状地の扇央部にあたり、礫がちな土壌の上、地下水脈が最も低くなるため、非常に水が得にくい土地です。

発掘調査では、奈良時代から室町時代にかけての遺構・遺物を確認しました。なかでも、奈良時代や平安時代には、盛んに水利条件の悪い土地を開発した様子がうかがえます。

野村北遺跡・野村遺跡の周辺に目を向けると、右図のような遺跡があります。^{かねかい}金貝遺跡で、平安時代の神社遺構や奈良時代の大型建物跡などがみつかったことは、報道もされ、まだ記憶に新しいことと思います。土位^{どい}遺跡では、飛鳥時代の建物跡がみつかっており、この一帯では最も古い時期の遺構となります。このように野村町周辺地域では、奈良時代や平安時代といった古代のムラの様相が、少しずつではありますがわかってきました。



- 1. 野村北遺跡 2. 小山遺跡 3. 陣屋遺跡
- 4. 野村遺跡 5. 金貝遺跡 6. 札の辻遺跡
- 7. 広間寺遺跡 8. 土位遺跡



奈良時代の土器

奈良時代の遺構には、竪穴住居・掘立柱建物・水路跡などがあります。

竪穴住居は7棟みつっていますが、いずれも4m四方程度の大きさで、カマドが造り付けられていました。

掘立柱建物は1棟のみですが、^{かこ}鉸具というベルトのバックルにあたる部分が出土しました。当時、このようなベルトをすることができるのは、中央の貴族や役人、地方の有力者などです。



鉸 具



水路跡

灌漑水路は、扇状地の開発には必要不可欠なものです。このような水路を掘り、扇状地上を開発したのでしょうか。平成20年度に行われた金貝遺跡の調査でも、このような水路跡がみつかっています。

ここで注目されるのがいかだがわ筏川と呼ばれる灌漑水路です。

- ・筏川は、別名「狛井」とも呼ばれる。
- ・「狛の長者」が開削したと伝えられる。
- ・現在の筏川は、東近江市寺町で取水し、野村町一帯を灌漑し、みつくりやま箕作山南裾のおわき小脇へと導水される。
- ・狛の長者は小脇あたりにすんでいたと伝承される。
- ・鎌倉時代以前には、東近江市寺町より下流で取水していたと考えられる。
- ・最初の取水口はこまでら駒寺（野村町の東側）あたり？
- ・狛の長者は駒寺にある高麗寺の信者であったと伝承される。

これら筏川にかかわる事実や伝承から、この地域の開発には渡来人が関わっていたのではないかと推測されます。「狛の長者」という人物が実際にいたのかはわかりませんが、有力者がこの扇状地上の開発を推し進めたと考えられます。ただし、考古学的にはこの地域における渡来人の足跡も、古代寺院としての高麗寺の存在も確認されていないため、まだ憶測の域をでません。

もう一つ注目されるのがだいあんじ大安寺です。大安寺は南都七大寺にも数えられる平城京にある大寺院です。747年の『だいあんじがらんえんぎならびにるきしざいちょう大安寺伽藍縁起並流記資材帳』に「かきみそのしょう神崎郡柿御園莊一処」とあり、野村町を含むこの地域が大安寺の莊園であったことがわかります。この莊園がいつどのようにして成立したのかはわかりませんが、莊園の成立が開発を促進させたことは想像に難くありません。出土した鉸具も大安寺の関係者、あるいは開発に携わった地域の有力者が身に着けていたものかもしれません。



- ・ A－B間の筏川は直線的なルートとなる。
- ・ この直線区間の両端延長線上に、「駒寺」と「小脇」が位置している。
- ・ この駒寺－小脇間を結ぶ直線が当初の「狛井」か？
- ・ 調査でみつかった水路跡は、この直線上に近い場所！

奈良時代のムラとほぼ重なるように、平安時代のムラも確認しました。この時代になると、それまでの竪穴住居にかわり掘立柱建物で生活するようになります。調査では、建物跡のほか溝跡や道路跡、鍛冶炉などがみつかりました。



掘立柱建物



溝の中からみつかった道路跡
溝中右側の帯状の高まりが道路跡



フイゴの羽口（鍛冶炉の部材の一部）
鉄滓に付着した状態で出土しました



出土した鉄製品

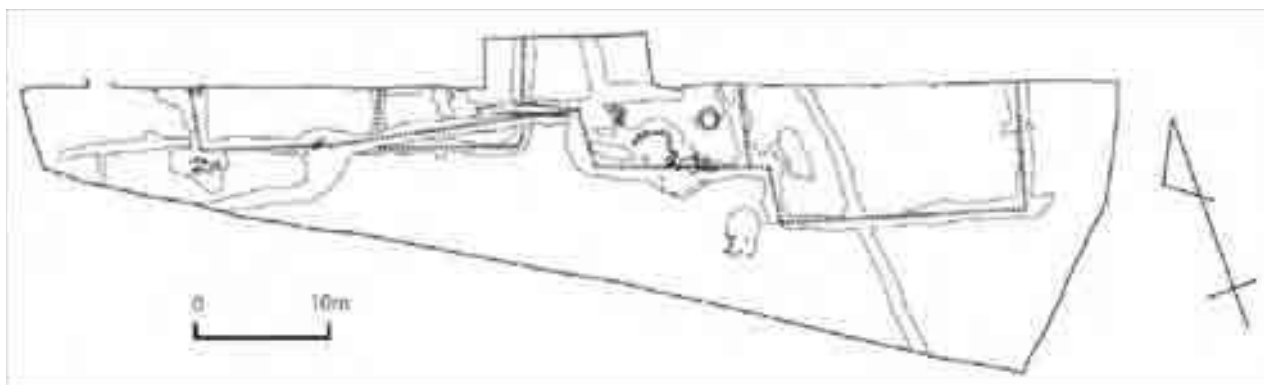


鍛冶をしているようす
『職人尽絵』（埼玉県喜多院蔵）

紡錘車をつかって糸を紡ぐようす
『石山寺縁起』より



地元で「アンノモリ」と呼ばれる周囲の水田より一段高い畑地より、室町時代後期（約500年前頃）の屋敷跡の一部とみられる遺構がみつかりました。周囲に溝を巡らせ、内側には石を利用して作られた井戸や溜め枡状遺構などがみられます。屋敷地を囲む溝は何度か作り替えをしたことがわかりました。一方、屋敷地の外側には、ほとんど遺構がありません。



調査区平面図（図面上方が屋敷内）



調査地全景（右側が屋敷内）



石組の井戸



溜め枡状遺構



室町時代の土器

今回発見された屋敷地はいったいどのような性格だったのでしょうか。ここにヒントとなるひとつの絵図があります。



「大安寺三綱僧領近江国神崎郡高屋郷柿御園荘絵図」(部分)

この絵図は旧永源寺町に所在する歳苗神社が所蔵しているもので、文亀2(1502)年9月16日の日付が記されていることから、16世紀初頭の野村町を含む柿御園荘の様子を描いたことがうかがえます。ちょうど、みつかった屋敷地と同じ頃のものとなります。絵図の中央に「大安寺地頭代公文所屋形」なる屋敷が描かれていますが、この場所をよくみると、今回みつかった屋敷地と位置的にほぼ一致していることがわかりました。時代も一致しています。屋敷地は「大安寺地頭代公文所屋形」だったのでしょうか。残念なことに、この絵図に描かれている内容が、当時における荘園の領有関係とは異なっているようで、信憑性は低いと考えられています。奈良時代はともかく、室町時代にも大安寺の柿御園荘であったという事実が確認できないのです。しかし、当時、絵図と一致する場所には実際に屋敷が存在していました。この屋敷がモデルになり、さらには奈良時代に大安寺の柿御園荘がこの地に設置されていたという史実が加味されて、絵図中の「大安寺地頭代公文所屋形」として描かれたのではないのでしょうか。

津から浜

—大津市関津遺跡—

I 関津遺跡の概要

1. はじめに

関津遺跡は、平成14年度に県営ほ場整備事業に伴う試掘調査で新規に発見されたため、関津地先の約30haを対象として、平成14～19年度に121か所の調査区を設定して約40,500㎡の発掘調査を実施しました。さらに、ほ場整備に伴う調査と並行して、平成16・17年度には国道422号道路改築事業に伴う発掘調査、平成15～19年度には大津市教育委員会が市道改良工事と個人住宅建設に伴う発掘調査を実施しています。

以下の内容は、ほ場整備および国道改築に伴う調査の成果に基づいていますが、ほ場整備の調査成果は平成21年度までの予定で整理中であるためその内容は現段階での見解です。なお、ほ場整備に伴う平成15年度の調査成果は平成19年3月刊行の調査報告書、平成16・17年度の調査成果の一部は平成21年3月に刊行します調査報告書、国道の調査成果は平成20年3月刊行の調査報告書、市教委の調査成果は各年度の市教委刊行の調査年報をご参照下さい。

2. 遺跡の位置

関津遺跡は、滋賀県の南部、大津市関津1丁目・5丁目に所在し、琵琶湖から唯一流れ出す瀬田川と信楽谷から流れ出た大戸川だいどとの合流地点の少し下流、瀬田川東岸の田上低地から田上山系北麓の標高約84～94mの平野部から低丘陵部にかけて立地しています。

周囲には、北側に弥生時代の拠点集落である可能性が高い太子遺跡、東側に平安時代の掘立柱建物や和同開珎が検出された里西遺跡、南側に鎌倉時代まで遡る可能性がある関津城遺跡があり、さらに周辺には、南に田上、東に南郷、北に瀬田丘陵の飛鳥～奈良時代の製鉄を中心とする生産遺跡群、瀬田川と大戸川合流点に古墳時代中期の大日山古墳群、白鳳寺院である石居廃寺いしずえ、その北には飛鳥時代中葉に造営された横尾山古墳群、瀬田川上流部の瀬田橋の東西両側には、近江国庁、粟津頓宮あわづとんぐう、保良宮ほら、国分寺（瀬田廃寺こくしやう、国昌寺）、石山寺など奈良～平安時代の寺院や官衙群が展開しています。また、関津遺跡が立地する田上低地一帯には約40度西に傾く条里地割が現在も残っています。

3. 調査成果の概要

これまでに、後期旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物を確認しています。

- ① 後期旧石器時代 縄文時代以前の堆積層からサヌカイト製の角錐状石器が1点

出土しています。

- ② **縄文時代** 草創期のサヌカイトとチャートの有舌尖頭器がそれぞれ1点、後期は舌状に張り出した丘陵縁辺部で弧状に配置された落とし穴8基、丘陵裾部で土器埋設坑1基、土器溜り1箇所その他、調査地全域からサヌカイトの剥片を中心に石鏃、石錘、石斧、石核などが出土しています。また、晩期の土器棺墓も1基検出しています。
- ③ **弥生時代** 丘陵縁辺部から裾部で後期の竪穴建物10棟と溝を検出しています。当該期は、本遺跡の北に位置する太子遺跡が田上地域の拠点的な集落と考えられるため、関津遺跡で検出した遺構は、太子遺跡を中心とする集落の一部である可能性が高いと考えられます。また、細片ですが前期と中期の土器も出土しています。
- ④ **古墳時代** 溝と河道を検出しているに過ぎませんが、調査地の南に後期古墳が存在したことを窺わせる須恵器が2地点で出土していること、出土地点の南に「まめ塚」、「太鼓山」と呼称される小字名が残っていることなどから、関津には少なくとも2地点に後期の古墳が存在した可能性が高いと考えられます。なお、後期の河道からは、瓢箪が1点出土しています。
- ⑤ **飛鳥時代** 丘陵の広範囲で中葉から後葉にかけての竪穴建物10数棟、溝、流路を検出しています。また、溝からは7世紀第2四半期の墨書土器が1点出土しています。この墨書土器は、飛鳥地方からの搬入品である可能性が高い土師器杯の底部外面に2文字「岡（異字体）本」ないし3文字「四十古」が墨書されたものです。その他に、当該期のものである可能性が高い2間×2間の総柱建物、製塩土器も1点出土しています。
- ⑥ **奈良時代前葉** 遺物量が少なく不明な点が多いのですが、おおむね正方位の主軸をとる掘立柱建物を数棟検出しています。
- ⑦ **奈良時代中葉～平安時代前期** 『続日本紀』に記述のある幅員18mの道路跡、掘立柱建物70棟以上、井戸8基、鋳銅遺構1基、河道などを検出し、須恵器や土師器その他、墨書土器、硯、緑釉陶器、製塩土器、土馬、瓦、帯金具、木沓、木簡、人形代、櫛、銭貨、砥石、埴塼、鞆羽口など官衙的遺物を中心に多数の遺物が出土しています。
- ⑧ **平安時代中期** 掘立柱建物数棟、畠跡（素掘小溝群）、河道を検出し、河道から木簡が1点出土しています。
- ⑨ **平安時代後期～鎌倉時代** 掘立柱建物100棟前後、井戸10基以上、土坑墓10基以上、畠跡（素掘小溝群）数箇所を検出し、大和もしくは南山城地方から搬入されたとみられる瓦器や羽釜を中心に、東播系の鉢や甕、常滑の鉢や甕、漆器、輸入陶磁器、石鍋、砥石、椀形滓、銭貨、烏帽子、櫛、毬、建築部材、木製農具、呪符木簡、絵画木板などが出土しています。

- ⑩ 室町～江戸時代 江戸時代に膳所藩が代官所を置いて管理した「関津浜」に近接する調査区で港湾施設の一部とみられる護岸施設、現在の集落と近接する調査区では堀の可能性のある区画溝を検出し、信楽の鉢、壺、甕、瀬戸美濃の皿、茶臼、天目茶碗、風炉など多数の茶道具、また、遺構に伴うものではありませんが、ガラス製の^{こうがい}筭も1点出土しています。

4. 道路跡

道路跡は、南から北に向かって緩やかに傾斜する丘陵上を南北方向に延び、道路の両側に側溝を備えています。側溝は後世の削平によって部分的に残存しない箇所もありますが、東西ともに幅1～2m、深さ10～30cmの規模で、断面形状はおおむね台形を呈し、西に約14°傾いた方位で約250m（大津市教委調査分を含めると約300m）にわたって同じ間隔で直線的に延びており、側溝の心心距離（幅員）は約18m、推定される路面幅は約15mです。また、側溝の一部では重複する新旧2条の溝を検出しています。これは、当初開削された溝の埋没後に再度掘り直されたもので、当初の幅に比べると約半分の規模に縮小されています。

路面の構造は、路面部分が後世の削平と9世紀中葉以降に形成される流路によって破壊されているため不明ですが、側溝など道路敷から礫石等が出土していない点から、路面や路肩の舗装は施されていなかったと考えられます。また、路面部分を破壊する流路は道路敷を超えず、建物敷に及ばないため、路面部分は建物の敷地よりも低い位置に敷設されていたと考えられます。このことから道路の敷設方法は、いわゆるオープンカット工法が用いられていたと考えられます。

道路の整備時期および廃絶時期は、側溝から8世紀中葉から9世紀中葉までの遺物が出土し、側溝の最終的な埋没時期が9世紀中葉であり、道路を破壊する流路が9世紀後半に形成され11世紀後半まで断続的に機能していることなどの点から、8世紀中葉に整備され、9世紀中葉に廃絶したと考えられます。

5. 道路沿いの建物群

南北方向に延びる道路の両側では、掘立柱建物約70棟、井戸8基、鋳銅遺構1基などを検出しています。

掘立柱建物は、規模が判明しているもので、側柱建物では7×2間、6×2間、5×2間、4×3間、4×2間、3×2間、2×1間など、総柱建物では3×3間、3×2間、2×2間などの建物があります。側柱建物で最大のものは、西廂が付く7×2間の建物で、身舎の床面積が約71㎡、廂を含む床面積は116㎡です。総柱建物で最大のものは、床面積約26㎡の3×2間の建物です。

井戸は、丸太刳抜き、横板井籠組、縦板組無支持、縦板組隅柱横棧止の4基があり、

8世紀後葉に廃絶するものと9世紀中葉に廃絶するものを確認しています。これらの井戸は、その位置から建物に併設されたものとみられます。

溝や柵などの区画施設は確認できませんが、建物や井戸の配置、空閑地の在り方などから考えると、建物や井戸は、道路を中軸とするおおむね1町（約109m）を単位とする方形の区画に計画的に配置されていたとみられます。

建物群は、主軸方位を道路の主軸に揃え、かつ道路敷きに及ばない点から道路と並存しかつ道路の規制を受けていたと考えられます。建物群の広がり、検出した遺構の他、残存する地割や地形から推測すると、南北500m、東西600mの範囲と推定され、南から北に向かって緩やかに降る傾斜地形を活かし、道路の両側に雛壇状の方形区画を造成して計画的に配置されたと考えられます。

建物の柱穴からは遺物はあまり出土していませんが、側溝や井戸からは、暗文土師器、須恵器壺G、硯（円面硯・形象硯・風字硯・転用硯）、墨書土器、土馬（宮都型・在地型）、製塩（焼塩）土器、緑釉陶器、瓦、磚、銚帯、錢貨（和同開珎・神功開寶・隆平永寶）、埴塼、砥石、人形代、木沓など、一般の集落遺跡ではあまり出土しない多数の官衙的遺物が出土しています。これらの遺物の時期は、おおむね8世紀中葉から9世紀中葉にかけてのものです。

建物群の性格は、桁行5間以上の規模をもつ比較的大型の建物が多いこと、また、官衙的な遺物が多数出土していることなどから、一般的な集落ではなく、官衙の一部である可能性が高いと考えられます。そして、存続時期は、周辺で出土した土器から、8世紀中葉から9世紀中葉にかけての時期と考えられ道路の存続期間と同時期と考えられます。

なお、これまでの調査で、官衙的建物群の南側と東側に展開する7世紀中葉の竪穴建物に近接もしくは重複する地点では、道路沿いの建物群の主軸方位とは異なり正方位からやや東に傾く主軸方位をとる3×2間の側柱建物と2×2間の総柱建物も数棟確認しています。そして、異方位の建物の周辺では、7世紀後葉から8世紀前半にかけての遺物が出土していることから、異方位の建物は、8世紀中葉～9世紀中葉の官衙的建物群に先行する時期のものと見られ、幅員18mの道路が整備される以前の建物と考えられます。藤原京が造営される際には、関津遺跡を含む田上の地から用材が徴用されたことが『万葉集』に載る歌によって知られていますが、当該期の建物はこれに関わるものである可能性が高いと考えられます。

6. 道路跡と建物群について

道路は、広い幅員をもち、両側に側溝を備え、直線的に敷設されている点から、官道もしくはそれに類する幹線道路である可能性が高く、敷設位置と整備時期から、『続日本紀』に記載された「田原道」であると考えられます。さらに「田原道」は、近江と平城京を最短距離で結ぶ道であることから、故足利健亮氏が指摘するように「東山道」の一

部であった可能性もあります。一方、道路の幅員が地方の一般的な官道の幅員に比べ広い点については、敷設位置が近江国庁や保良宮（京）の南に位置し、道路の整備時期と近江国庁の整備時期、さらには保良宮（京）の造営時期と同時期である点から、近江国庁もしくは保良宮（京）の南北大路として位置づけられたためと理解することもできます。

道路の両側に展開する建物群は、大型建物や官衙的遺物が多い点から、一般集落ではなく官衙であると考えられます。さらに、一部の建物については、『正倉院文書』に記載された石山寺増改築に際して設置された田上山作所に関連する施設である可能性もあります。しかし、建物群は存続期間が長期におよび、また、配置も変化しています。これは、時期により施設としての性格や機能が変化したためと考えられます。出土した硯に全国的にも出土例が少ない形象硯（京都府樋ノ口遺跡の羊（龍）形硯に類似）を含む点や立地場所等を勘案するならば、単なる地方官衙の出先機関とは考え難く、中央に直結する複合的な機能を有する官衙である可能性が高いと考えられます。

今回見つかった道路は、近江と都である平城京を最短距離で結ぶためのものですが、都が長岡京、平安京へと遷った後も廃絶することなく9世紀中葉まで半世紀にわたって同規模のまま維持されます。この点については未だ答が見いだしていませんが、『日本文徳天皇実録』に載る天安元年（857）の大石関設置記事が手懸かりになると考えられます。

なお、現段階では推測の域をでませんが、これまでに確認した遺構と遺物の状況から、関津遺跡には、今回見つかった道路に先行する道路が7世紀中葉もしくは8世紀前半までに敷設されていた可能性が高いことが明らかとなりました。残念なことに先行する道路の遺構は確認出来ていません。しかし、8世紀中葉に敷設された幅員18mの道路は、既に敷設されていた道路を何らかの理由で拡幅整備もしくは敷設し直したものである可能性が高いと考えられます。

7. 平安時代中期から鎌倉時代の関津遺跡

調査対象地の全域で、平安時代中期頃（9世紀後半～11世紀前半）は遺構・遺物とも希薄となり、平安時代後期から鎌倉時代にかけて（11世紀後半～13世紀）は遺構・遺物ともに激増する状況が判明しています。

平安時代中期頃は、道路の東側で畠跡、掘立柱建物数棟、井戸1基、西側で掘立柱建物数棟を確認するにとどまります。この時期の建物と畠跡の主軸方位は、道路の主軸方位と同じ方位をとり、道路敷に形成された流路も機能しています。また、道路跡の北約100mの地点に位置する河道からは、水田の用排水に関わる指示を告示したとみられる9世紀末から10世紀前半の木簡が1点出土しています。

11世紀後半に道路敷の流路は埋没しますが、この頃から道路跡周辺に掘立柱建物が増加し始め、12世紀から13世紀にかけての時期には遺跡の全域に建物の分布が広がります。

当該期の建物は、遺跡中央部に位置する道路跡周辺の中央域、遺跡の東域、遺跡の西域の3群に分けることができます。これは、中央域と東域の間には南北方向の谷地形、中央域と西域の間は河道が横たわっているなど、自然地形の制約もあります。これら3群は、立地する地形が違う他、建物の主軸方位や配置、井戸の密度などにも違いをみることができます。中央域は、建物の主軸方位を条里地割に揃えたものもありますが道路の主軸方位に揃えたものが多く、井戸の分布密度が低く、13世紀後半に廃絶します。東域は、ほぼ全ての建物が条里地割に揃えた主軸方位をとり、井戸の分布密度が高く、13世紀後半に廃絶します。西域は、西域の中央部分をおおむね東西に流れる河道を挟んで状況が違います。河道の東側の建物は概ね正方位の主軸方位をとり、14～15世紀の建物も確認できます。一方、河道の西側の建物は条里地割に揃えた主軸方位をとり、13世紀後半に廃絶します。

出土遺物は、近江の当該期の遺跡とは大きく異なっています。なかでも供膳具の椀と煮炊具にその特徴を見ることができます。関津遺跡が位置する湖南地域では、供膳具の椀は近江型と称される在地産が多数を占め、これに山茶碗や大和型瓦器椀、輸入陶磁が少量加わるのが一般的であり、煮炊具も近江型が多数を占めます。しかし、関津遺跡では、供膳具の椀は大和もしくは南山城地方から搬入された瓦器椀が多数を占め、次いで白磁椀が多く、在地産の近江型黒色土器椀は少数しかありません。また、煮炊具も、主体は大和型であり、次いで河内型、京都型の搬入品であり、近江産は少数しか入っていません。さらに、調査面積が広い点を考慮する必要がありますが、輸入陶磁器についても椀や皿を中心に壺や盤、合子など多数出土しており、他の遺跡に比べて出土量が多い傾向が認められます。これらの違いは何故なのでしょう。それは、一般的な農村集落とは異なる性格を有しており、その背景には集落の立地と生業にあると考えられます。

関津の集落の立地は、水路である「瀬田川」と陸路である「田原道」の結節点に位置しています。また、その地理的な位置は、近江の南の玄関口的な場所でもあります。そして、集落の南には山である田上山があります。

この集落は、交通と地理的な要衝に位置していることから、水路と陸路を利用した流通に関わっていた可能性が高いと考えられます。さらに、田上山の山林資源を利用した手工業生産など農業以外の生業に携わっていた可能性も高いと考えられます。それゆえに経済的に富裕であり、近江国外で生産されたものを大量に所有することができたと考えられます。しかしながら、関津遺跡の集落の在り方はこれだけの理由では説明しきれません。これ以外にも幾つかの要因があると考えられます。この点については、未だ答えを見出せずにいます。

8. 室町時代の関津遺跡

室町時代（14～16世紀前半）は、遺跡の全域で遺構の分布が希薄となります。しか

し、現集落に接する調査区では土坑や溝などが確認でき、また、信楽の鉢を中心に比較的多くの遺物が出土しています。これは、居住域が現集落の位置に移動し、同時にそれまでの居住域が耕地となったためと考えられます。そのため、建物は数棟しか検出していませんが、本遺跡で最も西に位置する瀬田川東岸の調査区では、2時期の護岸施設を検出しました。護岸施設は、江戸時代、膳所藩が代官所を置いて管理した「関津浜」の北に位置しています。この護岸施設は、規模や位置から考えると、かなり大規模な港湾施設「津」の一部であると考えられます。

今回見つかった護岸施設は15世紀以降に構築されたものですが、「津」としての港湾施設は飛鳥時代に整備された可能性が高いことから、調査地点の南の「関津浜」の位置には、これに先行する港湾施設「津」が埋まっていると考えられます。

Ⅱ 津から浜

1. 江戸時代の「関津浜」

関津の集落の西端、瀬田川東岸には、現在は宅地となっている一角に常夜灯^{じょうやとう}が残されています。かつてこの一帯は「関津浜」と呼称され、明治38年に南郷洗^{あらいぜき}堰が設置されて下流の水位が下がるまでは、主に大石方面で採取された薪炭木材を膳所や大津などに積み出す港として利用され、膳所藩が代官をおいて管理していました。

「関津浜」の南には、「関津峠」があり、この峠の頂には、大正8年（1919）に建立された「大石義民碑」と呼ばれる石碑があります。この碑には、大石から峠を越えて「関津浜」に薪炭木材を運搬する人馬に「関津浜」の代官が重税をかけたこと、慶長18年（1613）、大石の庄屋とその弟がこれに抗議して幕府に直訴しますが捕らえられて「関津峠」で磔^{はりつけ}にされたこと、後に二人の願いが聞き届けられて税が免除されたことなどが記されています。

2. 室町時代の「津」の護岸施設

「関津浜」北側の瀬田川東岸で2つの護岸施設が見つっています。護岸施設1は、川に並行して陸側の施設の基礎部分に積土^{せきど}の不等沈下を防ぐために敷粗朶^{しきそだ}を施し、主に松の横木と杭列で積土の土留めとし、積土の川側の法留めとして石を貼り付けた頑丈で大規模なもの、護岸施設2は、岸辺に杭を一行に打ち込んで護岸としたものです。

2つの護岸施設の構築時期は、鎌倉時代の建物や畠との重複関係と出土した遺物から、鎌倉時代以降に造られ江戸時代以前に埋まったと考えられます。そして、護岸施設1が瀬田川の土砂堆積の進行によって埋没し、その後に護岸施設2が作られたことが判っています。



関津遺跡の位置



室町時代の護岸施設 1

護岸施設 1 は、瀬田川の水 flow から陸地の宅地や畠地を保護するためのものと考えられるには構造が複雑であり、規模が大きく、敷設位置が「関津浜」に近接し、施設の形状が港湾施設に類似する点から、港湾施設の一部と考えられます。護岸施設 2 は、構造が簡略であり、規模が小さい点から単なる護岸である可能性も考えられますが、敷設場所の状

況から推測するならば護岸施設 1 と同様に港湾施設の一部である可能性が高いと考えられます。

ちなみに、室町時代までの関津の地名は、現在の呼称「関津（せきのつ）」ではなく、「関（せき）」と呼称されていました。2つの護岸施設は、江戸時代の「関津浜」の前身施設の一部であり、「関」の「津」の一部であったと考えられます。

3. 飛鳥時代から室町時代の「田原道」と「津」

関津遺跡では、全国的にも少ない、飛鳥時代中葉の墨書土器が出土しています。また、飛鳥時代後半の川からは製塩土器も出土しています。

奈良時代中葉には「田原道」が幅員18mの規模に整備され、道路沿いには官衙（役所）が配置されます。遺物では、多数の官衙的遺物とともに北陸地方と備讃地方の製塩土器が出土しています。また、井戸枠の側板には「筏穴」が残るものもあります。

一方、文献には、関津を含む田上のヒノキを藤原京の造営に供給したことが『万葉集』に、石山寺や保良宮の造営時には田上に「山作所」を設置して供給したことが『正倉院文書』に、藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱では「田原道」が利用されたことが『続日本紀』に、天安元年（857）に「関津峠」付近に「大石関」が設置されたことが『日本文徳天皇実録』に記されています。

関津遺跡で見つかった遺構・遺物は、文献の記述と関わるものと考えられますが、その背景には、関津が、水路「瀬田川」、陸路「田原道」を介する交通や流通の結節点に位置し、近江国と畿内との実質的境界である「関」・「関津峠」を扼すにとどまらず、「田上山」の山林資源を擁していたためと考えられます。

平安時代後期から鎌倉時代にかけての集落からは、多数の掘立柱建物とともに、南山城もしくは大和地方から持ち込まれた土器が多量に出土しています。一方、近江で作られた土器は、数える程しか出土していません。また、白磁や青磁など中国からの輸入陶磁器も多数出土しています。これは何を物語るのでしょうか。

近江の農村集落から出土する土器の内容とは明らかに違ってきます。この集落は果たして農村集落なのか、そんな疑問が沸きます。これを解く鍵になるのではと考えているものに鉄滓と井戸枠があります。鉄滓は、鍛冶と製鉄に伴うものが集落のあらゆる場所から出土しています。また、鉄鉱石も出土しています。井戸枠は、井戸に伴い何枚も出土しています。最大のものは、長さ約97・幅約45・厚さ約5cmのアスナ口の板です。この他にも、ヒノキ、スギ、コウヤマキなどの板も出土しています。

関津の集落は、農業のほか、手工業、立地を活かした流通や交通にも携わっていたと考えられ、そのため多数の輸入陶磁器を入手することができ、さらに、近江国内より南山城もしくは大和地方と深い交流を行っているために大和型の土器が多量に持ち込まれていると考えられます。

4. 田上の山林資源

「田上山」は、飛鳥時代後葉に木材や檜皮^{ひわだ}を採取するための「杣」^{そま}となり、奈良時代中葉には「田上山作所」が置かれました。

平安時代前葉の井戸から出土した板に「筏穴」が残るものがありますが、これは、田上山で採取された木材の製材や運搬の方法を知る手掛かりと考えられます。平安時代後期から鎌倉時代の井戸からは、アスナロ、ヒノキ、スギ、コウヤマキなど針葉樹の板が多数出土していますが、これは、集落の住民が普通に木材を消費していたことの現われと見るができます。また、鍛冶に伴う鉄滓も多数出土しています。これは、集落内で鍛冶を行っていたためです。さらに製鉄に伴う鉄滓や鉄鉱石も出土しています。これは、ほとんどが集落の廃絶後に流入したものであることから、平安時代後期以前のものである可能性が高いと考えられます。

関津は、「田上山」の麓に位置しています。この山は、木材を豊富に産出しました。一般的には、奈良の大仏を作る際にこの山の木材を大量に使用したために、この山が今に見る禿山^{はげ}になったと語られています。果たしてそうなのでしょうか。

関津に接した「田上山」には、少なくとも3箇所の製鉄遺跡があります。どれも実態は不明ですが、飛鳥時代まで遡る可能性もあります。

平安時代後期から鎌倉時代の集落ではコウヤマキやヒノキ科などの針葉樹が大量に消費されていました。果たして「田上山」は禿げていたのでしょうか。

「田上山」には、少なくとも鎌倉時代までは豊かな森林が残されていた可能性が高いと考えられます。それは、偶然ではなく、意図的もしくは計画的であった可能背もあります。「田上山」が禿げたのは、奈良時代の大仏が原因ではなく、鎌倉時代の大仏が原因であるのかも知れません。どちらも奈良の大仏ですが。

5. 「津」から「浜」

「関津浜」の近くで見つかった「関」の「津」の護岸施設では、主にマツが使われていました。そして、護岸施設は瀬田川の堆積と「田上山」から流れ出て瀬田川に注ぐ嶽川の堆積によって埋没します。その後、「関」の「津」の新たな港は「関津浜」と呼ばれます。

関津に飛鳥時代から奈良時代に整備された「関」の「津」は、室町時代頃まで「津」であり、江戸時代以降は「関津浜」と呼ばれるようになります。それはこの港が、水を湛えた港から、川辺の浜を利用した港に変化したためと考えられます。そして、その後もこの港への河川の堆積は進み、明治時代には、ほぼ現在の姿に変わっています。

「津」から「浜」への地名の変化は、港の景観の変化を表し、この変化の原因は、樹木豊かな「田上山」から樹木まばらな禿げた「田上山」へと変化していく過程にある可能性が高いと考えられます。

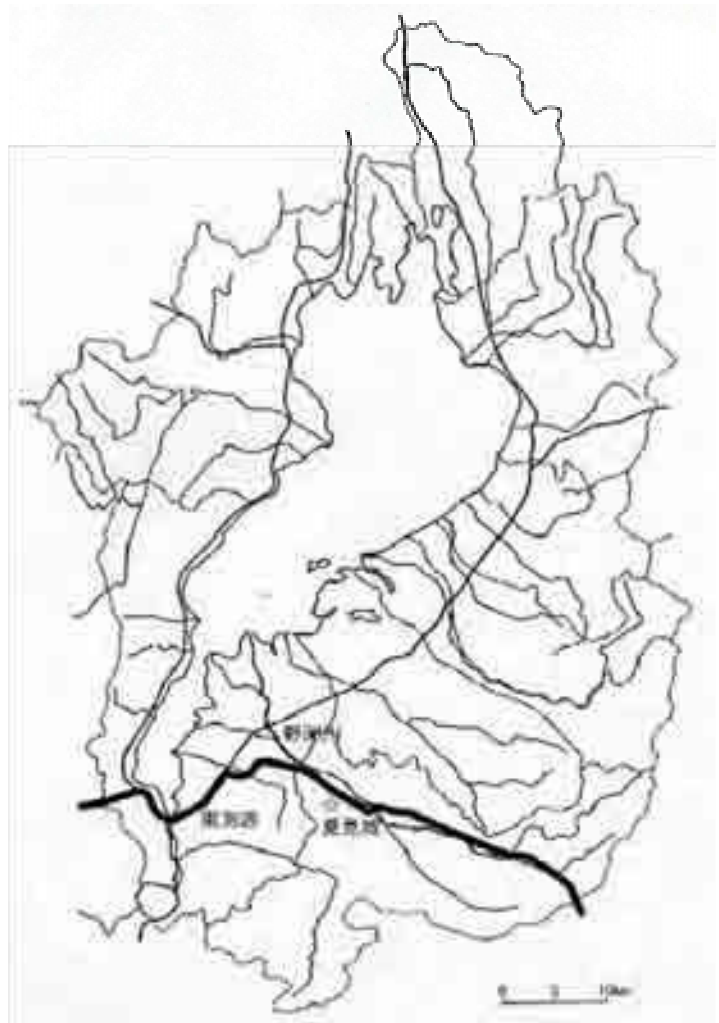
中世の城と街道

— 湖南市夏見城遺跡 —

1. 夏見城の立地—地理的環境—

夏見城遺跡が所在する湖南市夏見は、旧甲賀郡^{こうせい}甲西町のほぼ中央に位置します。旧甲西町は約57km²の面積がありますが、そのほとんどは丘陵地になっており、町域のほぼ中央を東西に流れる野洲川^{やすがわ}と南北の丘陵地との間の狭い沖積地に水田が拡がり、野洲川南岸に沿うようにルートをとる東海道に接して集落が展開しています。東海道の前身は「壬申の乱」(674年)の頃には存在しており、平安時代以降は伊勢参詣のメインルートとしての「阿須波道」^{あすわ}の色彩を強く残しつつ江戸時代には「東海道」として京と江戸を結ぶ重要な幹線道路となります。この東海道に面した野洲川南岸の低い丘陵上には、旧石部町^{いしべ}から三雲^{みくも}にかけて点々と「城跡」が存在しています。伝承だけのものや石垣・土塁などが残っているものなど様々ですが、夏見城遺跡の調査以前には分布調査が行われたのみで、実体は判明していません。

さて、西隣りの旧石部町には「京立ち石部泊まり」と言われる石部宿、同じ旧甲西町内でも東端にあたる三雲には横田の渡し、さらに旧甲西町域の東隣の旧水口町^{みなくち}には水口宿があり、今でも宿場町の風景を残していますが、現在の夏見には一見したところその面影はありません。では、そんな夏見になぜ城がつくられたのでしょうか。次に、歴史的な背景を探ってみましょう。



第1図 夏見城遺跡と東海道の位置

2. 「夏見」と「夏見氏」－歴史的環境－

夏見周辺からは、弥生時代に遡る遺物や古墳群の存在が知られ、二千年を超える歴史があります。平安時代中頃に編纂された百科事典『倭名類聚抄』には甲賀郡四郷の一つとして「夏身(なつみ)郷」が記され、興福寺末寺の光明寺が夏身郷にあったとする記録もあります。奈良時代には三雲に東大寺建立などに伴う甲賀郡内からの材木集積地の津が設置されるなど中央との関係が深く、夏見にも南都との関連をうかがえます。平安時代には高陽院領から近衛家領、鎌倉時代になると守護佐々木氏が管理する「檜物下荘」に含まれる村となり、1337年には足利尊氏から日吉社へ寄進されます。

政治・社会が共に不安定な時代であった室町時代、地域に根ざした地侍たちは力を持ち、自衛のために血縁・地縁の結束を固めます。特に甲賀郡内ではその動きが顕著で、同名惣・郡中惣というシステムが形成されます。これら地侍は、領主である六角氏から要請があれば戦に馳せ参じます。第9代将軍足利義尚が自ら赴いた六角氏征伐を失敗に追い込んだ鉤の陣(1487年)で特に軍功をあげ「甲賀五十三家」と称される中に「夏見氏夏見大学」の名があり、「夏見邑二子山」にあると伝えられている居城が夏見城と考えられています。甲賀五十三家の中には、宮島掃部介(平松)・針和泉守(針)・三雲新蔵人(三雲)など、街道沿いに夏見と連なる集落と城を本拠地とする名前もあがっています。

織田信長には所領安堵されますが、豊臣秀吉には没収され地侍たちの多くは田や畑に戻らざるを得なくなり、江戸時代以降は旗本領となり、明治を迎えます。江戸時代に再整備された東海道は、石部・水口が宿場町として栄えますが、当時の観光案内書や道中記をみると「古来から名前が替わらない夏見には上り・下り両方に立場(茶屋＝休息所)があり、酒店には「桜川」という名酒、心太を売る店があつて評判」などと、夏見が宿場の中間にもかかわらず結構活気のあったことが読み取れます。

時代	弥生	古墳	奈良平安					鎌倉		室町	江戸				
世紀	～ 3	4	5	6	7	8	10	11	12	13	14	15	16	17	18～
	古墳群 夏身郷・檜物下荘 夏見城 東海道														

3. 夏見城の構造－発掘調査でわかったこと－

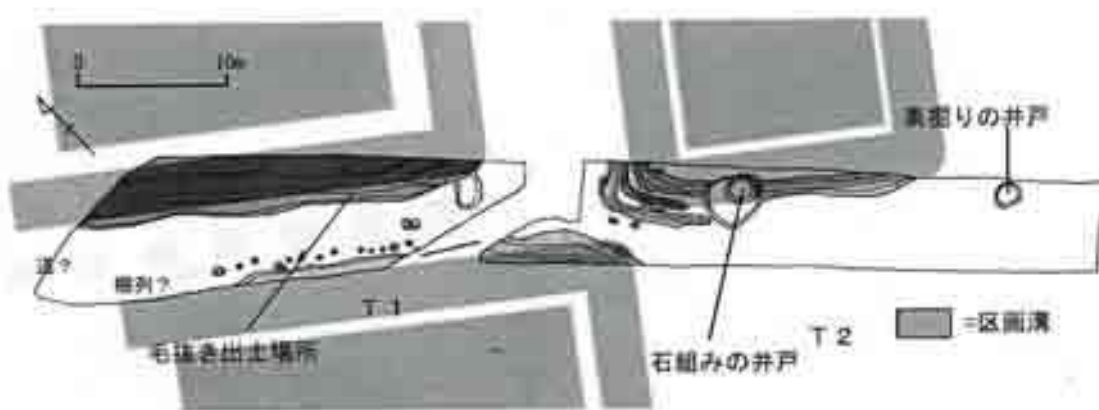
平成19年度に実施した発掘調査は、土塁^{どるい}などが残る丘陵上の城の本体部分ではなく、城の縁辺部にあたる丘陵裾部に調査区を設定しました。荘園であったとされる平安時代中頃の土器類も出土しましたが、主たる遺構としては室町時代・戦国時代の方形に巡ると考えられる直角な屈曲を持つ溝(堀)や柵列の可能性のあるピット列、井戸などが出土しました。溝は、一辺が少なくとも20m程度の規模があり、敷地を方形に取り囲むと考えられます。これらの溝と溝は連結せずに幅2～5m程度の空間があることから、道を挟んで独立する敷地が複数配置されていたことになります。

複数の敷地^{くるわ}(郭)で構成される城の場合は、敷地を取り囲む区画溝(堀)や土塁が連結して1つの城を構成していますが、今回検出した状況はこれとは異なっています。また、いざという時の山上・丘陵上の城本体とその前面の平地に日常生活を過ごすための館・屋敷^{やかた}がセットとなることから、今回の調査区域は丘陵上の城本体部分前面の丘陵裾部から街道にかけて配置された城に付属する通常の生活を営んでいた屋敷地だと考えられます。

では、この屋敷地は何のために造られたのでしょうか。城の前面に位置し、土塁を伴っていた可能性もある堀による防御性、普通の集落からは出土しない瓦や茶道具類、武士の必需品とも言える毛抜きなどの存在から、城主の館を含む武士階級の屋敷であると考えられます。



第3図 調査区位置図



第4図 遺構全体図

4. 夏見城の暮らしー出土品から見てきたことー

今回の発掘調査では、屋敷地内の建物をはじめとする施設については調査が及びませんでしたが、区画溝からは屋敷地内で使用された多数の遺物が出土し、夏見城での暮らしを垣間見ることができます。

「地侍」などと言うと、むさ苦しい・田舎臭いというイメージがあるかも知れませんが、そのイメージを払拭するような出土品が真鍮製の毛抜きと茶道具類です。毛抜きは、大名墓所などからの出土例にもあるように、武士の身だしなみには欠くことのできない品です。今回出土した毛抜きには、優雅な鶴と「勝ち草」として武将が好んで意匠に用いるオモダカが彫り込まれています。また、紅皿の蓋も出土しており、身だしなみにはかなり気を配っていたようです。



第5図 絵図に見る毛抜きの使用例

茶の文化は、室町時代には武士階級・富裕層を中心にかなり広まっており、夏見城からも出土しています。その中で注目されるのは、種類の多さです。多くの場合、茶碗と茶入れが出土する程度ですが、夏見城からは、茶碗・茶入れ・水指し・鬼桶・灰器・花入れ・風炉と、茶道具のほぼ一式が出土しています。水指し・鬼桶・灰器は地元の信楽焼きですが、その他の道具類は瀬戸・美濃産のみならず、「唐物」と呼ばれる高級輸入品や国内ブランド品である「奈良火鉢」の風炉も含まれています。



写真2 出土例の少ない灰器・水指しなど



写真3 国産（左）と輸入品（右）の茶碗



第 6 図

富裕層宅の茶道具

室内の棚の上に茶托に
載った天目茶碗・茶筌や
菓子鉢など置かれている

これらは単に自分が^{たの}愉しむだけではなく、一流のものを見る目を持ち価値がわかる文化力、またそれを手に入れることができる経済力を持っていることを示すためにも客人の持てなしに重用されたことでしょう。

今回の調査では、宴席の度に大量消費される「かわらけ」を含めていわゆる食器類の出土は極めて少量でした。一方、当時の万能調理具である擂り鉢・捏ね鉢と煮沸具の焙烙・羽釜が多量に出土しており、調理に関連する施設が近隣に存在していたとも考えられます。また、日常雑器に使われていた土器類の産地を見ると、焙烙などの土師器類は地元生産、擂り鉢・捏ね鉢などの陶器類はやはりお膝元の信楽産で、湖東から湖北でも極めて比率の高い東海地方の瀬戸・美濃や常滑はかなり少量です。東海地域に接しているとは言え、鈴鹿を挟んで隣接するのは伊勢であり、瀬戸美濃・常滑の東から西への主要な流通経路からは外れているということかもしれません。

今回の調査は限られた範囲から出土した資料なので、当時の生活のほんの一部を示すにすぎません。しかし、そこから見えてきたのは、戦や生活に追われ、汲々として髪振り乱したといった姿ではなく、道具を目で、茶を^{たしな}嗜み、身だしなみに気を配るような武士の姿です。そして、夏見城のような「こんな在所の城なのに？」ではなく、「こんな在所の城でも」ということが近年の調査例の蓄積によって明らかになります。



第 7 図

絵図に描かれた
台所の様子

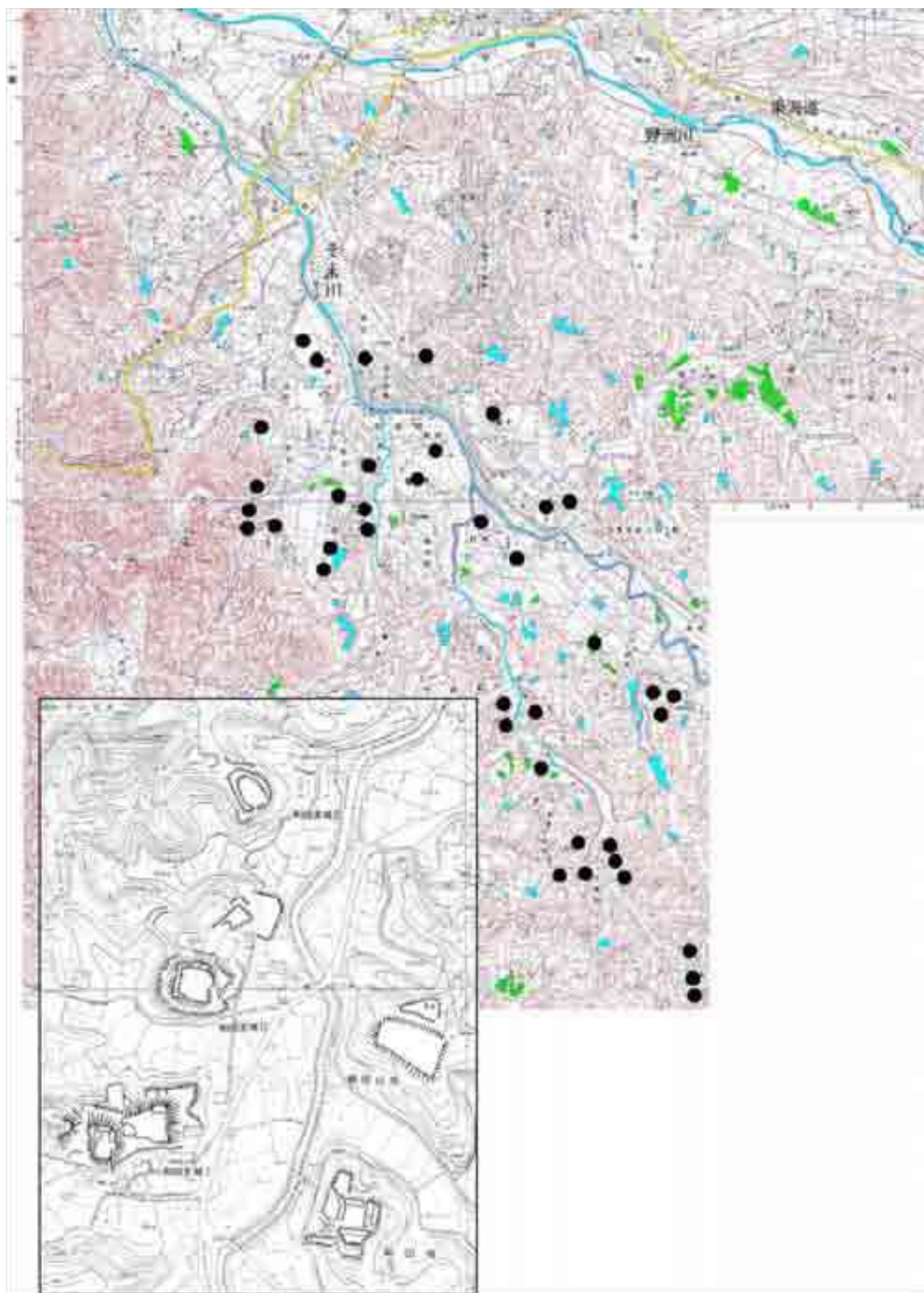
5. 夏見城と東海道―地域史の視点から―

石部から夏見を経て三雲までの数kmは、野洲川の両岸に丘陵地が迫り、東海道沿いの中でも最も狭い地域にあたります。中でも東海道が通る野洲川南岸には、10を超える城跡があり、ほぼ在所ごとにその背面の丘陵上に城があることになります。最も高所にあり、最も規模が大きく六角氏が入城しとともある三雲城は、六角氏重臣三雲氏の本拠地であり、三雲城を本城とすると夏見城を含む街道沿いの城は、街道を監視したり情報を伝達するための支城的な機能が考えられます。

この状況を、滋賀県内でも極めて高い密度で城が存在し、「甲賀の城」と称される同じ甲賀郡内の城と比較してみましょう。甲賀の城は、在所の中に土塁で囲まれた「方形^{たんかく}単郭^{きょかん}」の居館があり、その背面の丘陵・山上に本城と言える戦うための山城を持ち、これらが群となって機能していることが大まかな特徴と言えます。この特徴に照らして見ると、在所の中の館・屋敷と背後の丘陵上の城との組み合わせについては夏見周辺の城の在り方もこれに当てはまると言えるでしょう。

しかし、もう少し詳細に見ると違いも浮かび上がってきます。「甲賀の城」の典型とも言える旧甲賀町・甲南町では、街道や在所から離れた谷の奥まった場所に城が築かれており、同名惣に加盟する在所が、戦の際に入る城として隣接して群を成すように城を築いていたと考えられています。したがって、ひとつの在所に数多くの城が存在することになります。一方、夏見周辺では、街道に面して城が配置されています。旧甲賀町・甲南町の城の多くが、隠れ城としての性格が色濃いのに対して、夏見周辺の在り方はむしろ街道に面して誇示しているようにも見えます。今回は屋敷地部分の発掘調査がほとんど行われていないことから、直接的な比較はできませんが、方形の館・屋敷が点在するのではなく、夏見城では屋敷地が集中して配置されていることから、家臣・家来を集住させていた可能性があります。また、街道に面して職人・商人達も居住してたとすれば、城下町的な機能と景観が形成されつつあったとも考えられます。これは、その地理的条件にも大きく制約されている面も大きいですが、やはり主要街道である東海道があると言う点を無視することはできません。街道は、人・物資の動きだけではなく、それらを介して多くの情報を得ることができ、経済的なメリットも見込めます。だからこそ、物流・情報のネットワークを掌握する上で、夏見周辺は甲賀郡にとっては大きく開かれた扉として重要な位置だったのです。

これまで、^{かんのんじ}観音寺城・^{おだに}小谷城・^{じょうへいじ}上平寺城や^{あづち}安土城・^{ひこね}彦根城といった守護や戦国大名・藩主の城、^{かまは}鎌羽城や^{しみずやま}清水山城など山城、^{ごとうしやかた}後藤氏館のような有力家臣の平地に築かれた城館は発掘調査が実施され、実体が明らかになりつつあります。一方、今の集落の中や裏山に残る数多くの伝承の城は。近年の夏見城遺跡や近接する針氏城遺跡、あるいは^{ひだ}肥田城遺跡の調査成果は、これらの空白を埋めるものとして、また、その地の歴史的な特質を考える上でも、欠くことのできないものです。



第 8 図 旧甲南町の城の分布と同名惣・郡中惣の城



出土品展示解説

1. 縄文時代のお墓 29
2. 弥生時代 30
3. 古墳時代 31
4. 古代 32
5. 中世の遺跡 33
6. 網代の取り上げと保存処理 . . . 34

縄文時代のお墓

今回取り上げる大津市関津遺跡と草津市志那湖底遺跡では、ともにお棺に土器を使ったお墓＝^{どきかんぼ}土器棺墓が見つかっています。使われている土器の特徴から、どちらも縄文時代後期（約4,000～3,000年前）のお墓です。

関津遺跡では、深鉢形^{ふかばち}の土器1つを使ったお墓が見つかっています。上半分は削られて土器の中の土もほとんど残っていませんでしたが、穴を掘って埋められていたことがわかりました。周りにはほかに同じ時期の遺構がなく、この遺跡ではお墓だけが単独で作られたと考えられます。土器は半分くらいが残っていました（写真左）が、この時期のこの形の土器^{もとすみよしやま}（元住吉山式）を使ったお墓は、近畿地方では初めての発見です。

志那湖底遺跡は、その名の通り琵琶湖の湖底で見つかりましたが、水辺にあった集落がのちに湖水面の上昇により水没したものです。ここでは、深鉢形の土器3つを組み合わせたお墓が見つかっています。土器の特徴から、関津遺跡よりも新しい時期（後期の終わり頃）だとわかります。上に堆積^{たいせき}した土の重みで土器のお棺はつぶれていました（写真右）。このほかにも同じ時期の土器や木製品が周りでたくさん見つかっていますので、この遺跡では日常生活する集落と墓地が近くにあったと考えられます。

これらお棺に使われた土器はそれほど大きいものではなく、大人の遺体をそのまま入れることはできません。これまでの全国各地での発掘調査事例から、土器棺墓には2種類あることがわかっています。1つは小さい子供の遺体をそのまま土器の中に入れるものです。もう1つは、一度土に埋葬した大人の遺体をしばらくして掘り起こし、取り出した骨を改めて土器に入れて埋め直す「再葬墓^{さいそうぼ}」です。日本の土壌の多くは酸性なため、骨はほとんど残りませんし、子供の柔らかい骨はなおさらです。しかし、骨が残っていた数少ない事例から、お墓であったことがわかるのです。



関津遺跡の土器棺墓に使われた土器



志那湖底遺跡の土器棺墓

弥生時代の遺跡—草津市七条浦遺跡・高島市針江浜遺跡—

しちじょううら 七条浦遺跡 しもがさ 草津市下笠町地先

遺跡は旧草津川河口から葉山川河口の琵琶湖湖岸地帯です。調査は湖岸堤建設に先立ち昭和58年～平成2年にかけて調査しました。江戸時代、きうちせきてい木内石亭により七条浦で漁師の網に石剣がかかった記録が残されていたため遺跡として登録されていましたが、その実態は全く不明でした。遺物は現在の琵琶湖の水面下およそ1mの湖底で見つかりました。弥生時代前期から中期を中心とした壺・甕などの土器、鋤・鍬・泥除けなどの木製農具、穂摘み具の石包丁、管玉を磨く玉砥石などが出土しています。先人の記録の重要性を改めて確認した遺跡です。



木器出土状況



鋤



鍬

はりえはま 針江浜遺跡 高島市針江浜地先

調査は、針江漁港航路の浚渫のため昭和61年～平成元年に行いました。遺跡は港から500mほど沖合にあり、水面下約2mの湖底で見つかりました。

見つかった遺構は弥生時代前期の住居跡や中期の地震跡などです。住居跡は直径7mの円形で、前期の住居跡は滋賀県内では数が少なく、さらに湖底遺跡での発見は希少です。出土した土器は前期後葉の壺や甕です。この時期のまとまった土器は少なく貴重な資料といえます。湖国に米作りが伝わった早い時期に高島の湖岸周辺では低湿地を利用し水田を耕し、集落を形成していたことが明らかになりました。

また、中期にはマグニチュード7.5規模の大地震の痕跡である噴砂が見つかりました。その周辺からは、地震により倒壊したヤナギの大木の埋没林が見つかりました。



弥生時代前期の竪穴住居

古墳時代の遺跡—高島市^{ごくらくじ}極楽寺遺跡・日野町^{こみかど}小御門古墳群—

◆墓づくりの時代—古墳時代

今から約1800年から1400年前、日本列島の大半の地域では、さまざまな形や規模のお墓（古墳）をさかんに作り続けていました。あたかもお墓づくりを中心に社会が動いていたような印象さえ受けます。こんな時代はこれ以前にもこれ以後にもありません。まさに古墳づくりが最大の特徴となる時代、という意味でこの時代を古墳時代と呼んでいます。

今回は、最近調査を行った古墳時代の遺跡として、平成19・20年度の発掘調査によって、高島市マキノ町極楽寺遺跡と蒲生郡日野町小御門古墳群でみつかった古墳と、それにかかわる遺物をご紹介します。

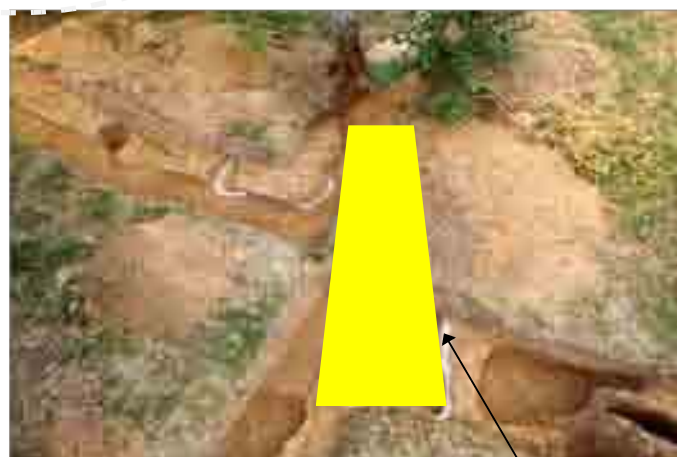


◆極楽寺遺跡の古墳

古墳時代後期初め頃の円墳2基がみつかりました。円墳の直径は15～20mです。墳丘は削られてしまい、古墳のまわりの溝（周濠）しか残っていません。溝の中から須恵器が出土しました。お供えものを入れていたと考えられます。

◆小御門古墳群の古墳

昭和40年に発掘調査が行なわれ、古墳時代後期後葉～末頃の古墳群であることがわかっていました。今回、保存のために試掘調査を行ったところ、4基の円墳を確認しました。また、それぞれの古墳の中心あたりで、木製のお棺を納めた穴の痕跡を見つけることができました。



お棺を納めた穴の痕跡

古代の遺跡 — 彦根市肥田城遺跡・東近江市野村北遺跡 —

古墳時代に続く飛鳥時代から奈良時代・平安時代を古代と呼びます。古墳時代と古代で大きく異なる点はいくつかありますが、政治体制の変化、つまり古墳時代とは異なり古代では、中央集権による律令と呼ばれる法律に基づいた国家体制となることが一番にあげられます。中央政府による法治国家となり、地方には中央より役人が派遣され、全国津々浦々で文書行政がおこなわれました。そのため、文字が普及し、出土遺物にも「木簡」や「墨書土器」といったように文字の書かれたものがみられるようになります。このうち墨書土器などは、役所ばかりでなく一般のムラでも出土することがあります。また、文字を記すために必要な道具のひとつである硯もみつかります。硯といっても、現在みるような石製のものとはちがい、須恵器という焼き物で作られていました。なかには、転用硯といって、日常つかわれる食器を硯として用いたものもあります。ムラのなかにも文字を記すことができるような人たちが居住していたことがうかがわれます。



えんめんけん
円面硯の破片



このような形の硯を円面硯と呼びます

野村北遺跡から円面硯の破片が出土しました。

円面硯は、古代の硯では最も一般的な形のものです。

肥田城遺跡では、墨書土器と転用硯が出土しました。

「蚊野」は同じ愛知郡内にあった蚊野郷（現愛荘町蚊野周辺）のことでしょうか。



墨書土器「蚊野」？



転用硯

中世の遺跡—大津市^{せきのつ}関津遺跡・湖南市^{なつみじょう}夏見城遺跡—

関津遺跡 大津市関津

発掘調査は、県営経営体育成基盤整備事業に伴い平成15～19年度、整理調査は、平成16～21年度の予定で実施しています。

関津遺跡では、平安時代後期から室町時代にかけての集落跡、室町時代の護岸施設が見つかりしています。

集落跡では、多数の掘立柱建物跡、井戸、墓、畠跡のほか、近江国以外から搬入された多数の瓦器や輸入陶磁器が出土しています。護岸施設は江戸時代、膳所藩が代官所を置いて管理した「関津浜」の前身とみられる港湾施設の一部と考えられます。

関津遺跡ではこのほかに、後期旧石器時代、縄文時代、弥生時代、飛鳥時代から平安時代中期にかけての遺構・遺物も多数見つかりしています。



鎌倉時代の墓

夏見城遺跡 湖南市夏見

発掘調査は、県営経営体育成基盤整備事業に伴い平成19年度、整理調査は、平成20・21年度の予定で実施しています。

夏見城遺跡は、甲賀五十三家の1つ、夏見氏の居城跡と言われ、東海道を見下ろす丘陵上の竹藪には幅3～4mの土塁が残っており、現在も見ることができます。

今回の調査では、城跡の北東側で、室町時代の溝、屋敷地とみられる溝に囲まれた3つの区画や井戸などが見つかり、調理具や食器、茶道具などの土器や陶磁器、瓦、真鍮製の毛抜きなどが出土しました。また、遺構は確認できませんでしたが平安時代の土器も出土しています。



真鍮製の毛抜き

網代の取り上げと保存処理

一日野町番場遺跡出土の網代ばんば — 網代あじろ —

1. はじめに

日野町番場遺跡の発掘調査により、古墳時代中期後葉（5世紀後半）と考えられる旧河川跡から網代が良好な状態で出土しました。この網代は、縦が約120cm、横が90cmの範囲で残っており、全国的に見てもたいへん大きい規模のものです。網代とは、スギやヒノキなどの針葉樹材を薄く割って組み上げたもので、各地の遺跡からカゴ等の容器や敷物などが出土しています。番場遺跡出土の網代は、構成される薄板の幅が広く全体に規模が大きいいため、当時の家の壁を飾る目的で用いられたと考えられます。

2. 網代の取り上げ

この網代は、当時の建築を考える上で貴重な資料であることから、現状のまま取り上げることになりました。網代は、埋蔵中に劣化が進行し強度が低下していました。そのため網代を単独で取り上げるのは危険が伴うため、網代を支える土ごと切り取ることになりました。

まず、網代の周囲に深い溝を掘って切り取りの準備をしました。網代は作業中に壊れることのないよう柔らかい紙を水張りして養生しました。次に、網代を支える土ごと切り取るため、周囲に硬質のウレタン樹脂を発泡させて全体を包み込んで取り上げました。今回使用したウレタン樹脂は、断熱材として広く利用されているもので、A液とB液とを等量混ぜ合わせることで反応し硬化します。網代の周囲を固めるとともに、上面にウレタン樹脂を流して硬化させてから、地面と切り離すため反転させました。そして網代の裏側の土を取り除いて軽量化し、現場から搬出しました。

3. 保存処理にむけて

取り上げた網代は、安土城考古博物館の収蔵室に搬入しました。その後、表面の土を取り除くクリーニング作業を行うなど、本格的な保存処理の準備をしています。今後の保存処理は、木製品の保存処理法として用いられているPEG含浸処理法により、網代全体を固める方針です。貴重な資料を安定化させることにより、安心して保管や展示ができるよう保存処理を計画し実施して行きたいと考えています。



1. 網代の出土状態



2. 紙を水張りして養生



3. 網代の周囲をウレタン樹脂で固める



4. 地面と切り離す



5. 反転し土を取り除く



6. 表面のクリーニング作業

あの遺跡は今！⑧

—埋蔵文化財整理調査成果報告会—

会場案内図

- ①調査成果報告会『ムラ・津・城』
- ②『縄文オリジナルアクセサリー』を作ろう
- ③整理作業室特別公開・出土品展示
- ④整理作業体験

Oh! shigaraki
「大信楽展」
開催中!! (～3/29)

特別展示室

博物館
入口

報告会『ムラ・津・城』
会場へ(2階セミナールーム)

受付

会場

受付

③出土品展示 (古代・中世)

③出土品展示 (縄文・弥生・古墳)

③特別展示

③整理作業公開

③整理作業室特別公開・出土品展示

土器の復元や実測作業など、遺跡からの出土品を調査している様子を間近に見学し、体験できます。

また、報告会で取り上げた遺跡を中心に、整理調査中の主な出土品を展示し、職員が解説します。

※現在整理調査中の主な遺跡

関津遺跡(大津市) 志那覇湖底遺跡・七条浦遺跡(草津市) 夏見城遺跡(湖南市) 小御門古墳群(日野町) 野村遺跡・野村北遺跡(東近江市) 極楽寺遺跡・針江浜遺跡(高島市) 肥田城遺跡(彦根市)

◇時間:午前9時から午後5時まで

書籍販売

③整理作業公開

③整理作業公開

②制作体験
「縄文オリジナル
アクセサリー」
を作ろう
(体験を見学できます)

④整理作業体験 (分類)

④整理作業体験 (拓本)

②『縄文オリジナルアクセサリー』を作ろう

縄文人のワザをつかって世界にひとつだけのオリジナルアクセサリーを製作します。

作業前には調査員により解説を行います。

◆時間:10時・12時・15時(各回一時間程度)

◆費用:500円(材料費)

③整理作業公開

①調査成果報告会『ムラ・津・城』

今年度に整理調査を実施した遺跡の中から、「ムラ・津・城」をテーマに、スライド等を用いて調査員が調査成果を報告します。

◇会場:2階セミナールーム

◇時間:午後1時から3時20分まで

◇定員:140名(当日受付)

◇報告遺跡:東近江市野村北遺跡・野村遺跡
(開発のムラ)
大津市関津遺跡
(津から浜)
湖南市夏見城遺跡
(中世の城と街道)

④整理作業体験

土器の美しい文様を拓本する作業など、整理調査が実際に体験できます。

出土品に直接触れながらの作業は、滋賀県の歴史を体感できる貴重な機会です。

◇時間:午前9時から午後5時まで

あの遺跡は今！⑧

平成21年2月22日(日)
財団法人滋賀県文化財保護協会